

吉原治良展 「The Persistence of Form」

ファーガス・マカフリー東京

2019年 6月29日(土)～8月7日(水)

オープニング・レセプション: 6月29日(土) 午後6時～8時

ファーガス・マカフリー東京は6月29日から8月7日まで吉原治良展「The Persistence of Form」を開催致します。

具体美術協会（「具体」）のリーダーであり、日本の抽象絵画のパイオニアでもあった吉原治良（1905～1972）。その吉原の半世紀にわたる画業の代表作が、一連の「円」の作品です。

吉原の「円」の作品は、一見すると禅宗の「円相」のように見えます。しかし、それらに宗教的な意味はありません。「円相」は僧が円満な悟りの境地を表すため、太い筆で一気に描くものです。一方、吉原の「円」は輪郭を縁どって描かれた形です。吉原にとって、「円」は精神的な世界ではなく、絵画における地と図の造形的な関係性を探求するためのモチーフでした。吉原は自身の円について、次のように書いています。



「このところ円ばかり描いている。便利だからである。いくら大きなスペースでも円一つでかたがつくということは有り難いことでもある。一枚一枚のキャンバスに何を描くかという煩しさから解放されることでもある。あとはどんな円が出来あがるかということである。あるいはどんな円をつくりあげるかということである。たった一つの円さえ満足にかけないことをいやほど知らされるはめに陥ることも白状しておこう。一本の線も完全にひけないということはそこから出発しなければならぬことでもある。そして、やはり一つの無限ともいえるべき可能性がこんなところに底なし沼のようなかたちでとりのこされてある。」



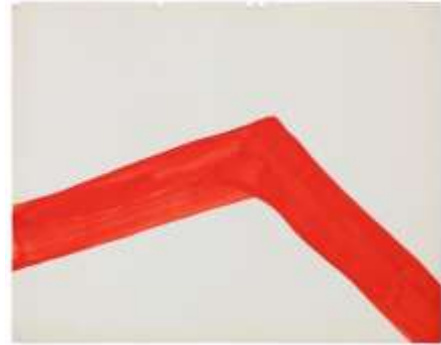
このように、1930年代後半から抽象絵画を描いてきた吉原は、数十年の試行錯誤の末、「円」という単純な形がじつは無限の表情を内包していることに魅せられ、1960年代初頭から「円」を執拗に描き続けました。

ここで吉原の円が、面ではなく「線」で形作られている点に注目しなくてはなりません。吉原が円のモチーフを発見するに至る過程には、「線」の探求がありました。吉原の「円」の前段階である1950年代の作品には、直線や曲線で画面を構成したものが多数見受けられます。吉原が1950年代に「線」にこだわったのはなぜなのか。その背景には、戦後、日本が主権を回復し欧米と対

等に向き合った際、日本人の抽象画家が一様に直面した課題がありました。

1952年、日本美術の国際復帰を飾るべく、吉原を含む当時の日本の代表的画家がパリのサロン・ド・メに自信作を出品します。ところがそれを見た美術評論家の今泉篤男は、帰国後、日本人画家の作品は外国人画家のそれと比べ「ハリ」や「強さ」がなく「モダモダ」しており、「近代画」には見えなかったとの印象を述べ、美術界に大きな衝撃を与えました。これを機に、国際性を保持しつつ日本人独自の表現をいかに獲得するかが、画家や美術評論家のあいだで真剣に議論されるようになります。

吉原をはじめとする関西の抽象画家は、その手がかりを書に求めようとしてきました。当時、書家のなかからも、戦後という新しい時代にふさわしい書を目指し、書の大前提である文字の文字性や筆、墨、和紙といった素材からいかに解放されるかを課題に、抽象絵画を研究する動きが現れました。吉原を中心にした関西の抽象画家と墨人会の森田子龍らは、1953年から55年頃にかけて、大阪で毎月開かれていた現代美術懇談会や墨人会の機関誌『墨人』、雑誌『墨美』を舞台に、親しく交流し議論を戦わせます。このように、吉原の直線や曲線で構成された抽象絵画は、書を通じ、余白と線との関係性を味わう感性を自然と身に付けてきた日本人ならではの表現であったのです。



その「線」による表現の延長が「円」でした。吉原は、日本人独自の表現を追求するだけでなく、国際性を保持することも忘れませんでした。吉原の「円」には、欧米に台頭しつつあったハードエッジの抽象絵画やミニマル・アートの明らかな影響が見られますが、彼にとってそれはたんなる模倣ではなく、戦後の再出発以来の日本的感性と欧米の最新の様式との融合の取り組みの結果でした。

吉原はこの「円」の作品で、1967年の第9回日本国際美術展で国内大賞、1971年の第2回インドトリエンナーレでゴールドメダルを受賞し、抽象画家としての評価を不動のものにします。しかし、彼は晩年「円」から脱却し、新たなモチーフに向かおうとしていました。それは漢字です。

漢字の意味性を排除し、純粹に形として捉えるため、彼は漢字を上下反対にしたり、左右を反転させたり、一部分をクローズアップして描きました。この探求は1972年、吉原の突然の死で終わってしまいますが、その後コンセプチュアル・アートが全盛し、概念の表象として文字が重要な意味を持つようになることを思うと、次に来るものを見とおしてきた吉原の感性の鋭さにあらためて驚かされます。

吉原治良

1905年、大阪生まれ。若手作家の師匠、美術評論家、美術界の先駆者として、吉原は戦後の日本美術発展における確固たる地位を築いた。活動当初、彼の作品はモダニズム要素をもつものだったが、徐々にジェスチュラル・ペインティング（身振りによる抽象絵画）へと移行していった。現代美術懇談会を結成す

るなど、ポスト印象派、シュールレアリスム、アンフォルメルや抽象表現などの芸術表現を熱心に研究した。吉原の現代美術史への徹底した理解は、後に創設した具体協会のなかで、創設者、指導者、または師匠としての彼の役割に影響を与えるものとなった。

物事の先を見据え、何事にも思考深い吉原が、1951年にジャクソン・ポロックの作品を目の当たりにすると、吉原はパフォーマンスとしての美術や、いままでにない新しい作品の制作こそが出発点になると考えた。画家は独創的な表現や作品の質を求めるだけではなく、それらが徹底的に実験的であるべきと提唱した。この信念こそ、具体メンバーが制作活動をするうえで一貫して持ち合わせた規範であり、また吉原自身も己の活動の中でこの信念を貫き、1960年代に発表された「円」シリーズの制作に至った。

円を基本形として、大きさ、左右の対象性や幅を探求しながら、吉原は紙やキャンバスの上にこのモチーフを描いていき、時に意図して塗料を滴下するなど、素材を使用した実験的制作も行った。晩年のころには、冷静に熟考されることで、和らげられるジェスチャーの即時性を明らかにするシンプルな円と線形形式への美学がさらに洗練されていった。

吉原の作品は、1997年の「パリ具体展」（ジュ・ド・ポーム国立美術館、パリ、フランス）、2007年の「Art, Anti-Art, NonArt: Experimentations in the Public Sphere in Postwar Japan, 1950-1970」（ゲッティ美術館、ロサンゼルス、アメリカ）、2012年東京での「具体—ニッポンの前衛 18年の軌跡」（国立新美術館）など国内外の具体回顧展で発表されてきた。1972年没。

ファーガス・マカフリー

ファーガス・マカフリーは2006年の設立以来、元永定正、白髪一雄、高松次郎など、戦後日本美術の国際的な評価を確立させるうえで中心的な役割を担ってまいりました。マーシャ・ハフィフ、ビルギット・ユルゲンセン、リチャード・ノナス、ジグマー・ポルケ、カロール・ラマなど独創性に富んだ気鋭の西洋作家の作品展示も行なっています。日本の美術や文化と深く沿うため2018年3月、ロバート・ライマン展を皮切りに東京・表参道に画廊を開設いたしました。2019年はアリ・マルコポロス（1月12日-3月9日）、ジャスパー・ジョーンズほか多様なプログラムを開催。

プレスのお問い合わせ：

ファーガス・マカフリー東京

Tel : 03-6447-2660

Email : tokyo@fergusmccaffrey.com

Images:

1. 吉原治良《無題》1965 - 70, アクリル、紙, 37.5 x 45.3 cm © Estate of Jiro Yoshihara
2. 吉原治良《無題》1965 - 70, アクリル、紙, 33.5 x 24.5 cm © Estate of Jiro Yoshihara
3. 吉原治良《無題》1965 - 70, 水彩、紙, 37.4 x 45 cm © Estate of Jiro Yoshihara

Map:

